



6月は父の日

～「おやこうこう」を、漢字で書けますか?～

校長 澤田 純一

時代は平成初期、私が教員として3年生の担任をしていた頃のことです。帰りの会でクラスの生徒に「おやこうこう」を漢字で書けるか聞いたことがありました。すると、漢字で書けない生徒の多いことに驚愕きょうがくしました。そして、「親考行」はまだ良いほうで、中には「親高校」と書いた生徒もいました。担任である私は、「親への感謝の気持ちが欠けている。または、親の気持ちを考えたことがないから書けないのだ。中学生としては恥ずかしいことである。」と説話をしました。

時は遡さかのぼり昭和63年3月初旬、大学卒業を控えていた私に一通の手紙が来ました。「4月1日（金）、午前8時30分までに、警視庁警察学校に集合せよ。なお、持参するものとして・・・」との内容でした。

私は大学4年生の時に警視庁1類の試験に合格し、次年度4月には社会人生活を警察官としてスタートすることになっていました。警察官の志望動機ですが、大学が法学部であったこと。剣道部に在籍し三段を取得していたこと。そして、その経験を生かし何よりも人々を幸せにしたいと考えたからです。（もちろんこの考えは今でも変わっていません。）

時を同じくして、父は病を患わずらっており、歩くこともままならず高熱が続く毎日で、医師からは余命3か月と宣告されていました。私は悩みました。警察学校は8か月間、全寮制で訓練を受けるのです。つまり、警察学校を卒業した時には父はもういないということになります。入校を辞退し父を看取みとるか、それとも自分の人生を歩むか、心の中は大きな葛藤でいっぱいでした。すると、3月31日の夕方、何やら風呂のぞから音がします。覗いてみると父が風呂掃除をしていました。私が、「父さん、寝ていないとだめだよ。」と言うと「明日は、お前の門出だ。ゆっくり風呂に入っていけ。」と父はやせた顔に笑顔を浮かべ言いました。そして、私は、「ありがとう。」と告げ、自分の部屋で啼泣ていきゅうしながら覚悟を決めたのです。翌朝、私は大荷物を背負い「行ってきます。父さん、元気でね。」父は「俺のことは心配するな。社会の役に立つ人間になるよう一所懸命頑張りなさい。」そのような会話を交わし、私は玄関を出ましたが、おそらく父と母は私の姿が見えなくなるまで、見送っていたと思います。しかし、私は涙を見られるのが嫌で、振り返ることをしませんでした。そして、これが父との今生の別れとなりました。

亡くなった父は、警察官の私しか知りません。しかし、校長室の窓から空に向かい「父さん。俺、何とかやっているよ。」と心の中で語り掛けています。毎日精一杯生きること、与えられた使命を果たすこと、つまり、親はいなくとも親孝行はできるのですね。

今日の話はこれでおしまい。6月も元気に過ごしましょう。👍

